幼児の性差の発生とその実態

仁科弥生

ここでは男女児の体力や運動量などの身体的相違ではなくて、いわゆる男らしさ、女らしさなどといわれている男女児の性格や行動などの特性について、その発生と形成の過程を考えてみましょう。

幼児の精神的発達は、両親をはじめ周囲の種々の有形無形の力との相互関係の中で行なわれます。この相互作用の中で行なわれる人間の発達の過程を社会化と呼びますが、性の類型化と同一化は、その社会化の一つとみなされています。すなわち同じ性の親との同一視によって、子どもはその社会での自分の性にふさわしい態度や振舞を習得すると考えられています。

性の類型化とは男児が女児と異ってくる過程を意味し、それは模倣的な段階であるとして同一化と区別されて考えられています。このような男性的行動や女性的行動が故意でなく、模倣的でなく、無意識に自然に、しかも行動全般に及んだ時、同一化が行なわれたといいます。

リンは同一化の過程を次の三つの段階に分けて考えています。

(イ) 性の役割の採択　(ロ) 性の役割の借用　(ハ) 性の役割の同一化

と。子どもに男性の役割のモデルとして適切な父親があり、女性の役割のモデルとして適切な母親があると、子どもは生理的に規定された各々の性の役割を好み、それをまねし、ついにはそれを同認す

るというのです　したがってもし男児が内心、女児でありたいと思ったとしても社会の力が男児の振舞をするように作用する。そしてもし男児が性の役割の好みをかえないならば、適切な男性同一化は不可能であると考えます。

コレイは同じ過程を三つの領域に分けています。第一を生理的領域と呼んでいます。その体格が女らしい特徴を持っている男児は、いかつい男らしい体格の男児より困難を経験するというのです。第二を社会的領域と称しこれはリンの「性の役割の採択」に似た概念です。第三を心理的領域と呼び、同一化によって男らしさや女らしさが形成されるといっています。

さて性の類型化の発生の時期とその本質について考えてみましょう。

幼児が自由に歩きまわる年令に達すると（大体一年六ヵ月以後）おとなはその行動に性別による違いを要求しはじめます。これはそういう性別にふさわしい行動をするようにと子ども達に対してくわえられるおとなからの、或いは社会からの制約なのです。こうして性の類型化は、子どもが信頼し、愛情を期待できるおとな（親）をまねることにまず始まり、親をはじめ、教師や兄姉、或いは遊び仲間からの賞罰によって強化され、後に同一化へとすすみます。

保育園に行く頃になると、性の類型化の徴候がかなりみえはじめます。男の子らしくしなさいとか、女らしくしなさいとかいうあからさまな制約が殆んどないたいへん許容的な幼稚園で遊んでいる幼児にもこのような性の類型化はみられます。車輪のついた玩具やピストルでの遊び、かけっこ、取っ組合い、綱あそびなどの遊びを男児が好むことは、三才になる頃にはすでに顕著です。同じ年令の女児はピストルより人形を好み、劇遊びやままごと遊びが大好きです。しかし学令前ではこういった行動のタイプにかなりの移り変りがあります。たとえば女児が人形の家をはなれて、ジャングルジムに熱中したり、男児が女児と一しょにしずかにままごと遊びをしたりします。

ではこの性の類型化に親がどのような役割を果たしているのでしょうか。男児のファンタジープレイには女児にくらべて、攻撃的なテーマが非常に多いことは一般にみとめられています。これは動作的に父親を模倣しているものと考えられますが、どの程度まで、父親のまねの結果であり、父親の男性的役割の認知の結果であるかは明らかではありません。そこにはフラストレーションという要因が作用していることも考えられます。普通の家庭では父親が最後の懲罰を与えたり、娘よりも息子をきびしく叱る場合が多いようです。また時には男が一しょにいたいと思う母親を父親が独占することもあります。もしこの年令の男児がとくに母親との関係が強く密接な場合には、これは男児にとって、フラストレーションであろうと考えられます。そこでもしフラストレーションが攻撃性をうながすもの

であれば、父親と一しょに生活をしている男児の方が、父親が不在の男児にくらべて、実際の生活場面においても、空想においても、より一層攻撃的であろうと想像できます。女児については、男児にくらべて、父親の在、不在のおよぼす影響は少ないと考えられます。

このことを実証するような実験結果が、ボーリン・シアーズによって得られています。父親が家にいない男児は、父親がいる男児にくらべて人形遊びにみられる攻撃性が少ない。これは父親をまねる機会がなかったためか、父親によるフラストレーションが少なかったためと考えられます。同じシアーズのもう一つの研究は、あたたかみのある寛大な父親には、適切に性の類型化をした息子が多いことを示しています。それは男児二〇二名、女児一七七名の幼稚園児について、家族人形に対する反応を記録し、家庭状況は母親との面接によって得たものです。したがって、父親についての資料は、すべて母親の口を通して得られたもので、父親とその息子との実際の交渉の観察ではありません。しかし、その人形遊びの中で、父親の役割を選んだ男児は（これを性の類型化が適切にすすんでいる規準にしていますが）あたたかい、許容的な、神経質でない父親を持っていることがわかりました。人形遊びの中で、母親の役割をえらんだ男児は、家庭では、父親ではなくて、母親が非常にあたたかみのある傾向を示しています。この種の男児の母親は、子どもの男らしさや女らしさについては、比較的許容的で、また子どもが家の外で遊ぶことを制限する傾向があり、夫に対してきわめて批判的な意見をもっています。このことが子どもに対して、父親についてこのましくない印象をあたえる仲介をした結果になっているとも考えられます。

また、両親は子どもがきわめておさない頃から性別によるふさわしい行動として、男女児を区別してしつけます。父親は遊び方が乱暴で、娘よりも息子と一しょに男の子の遊びをする場合が多い。一方、母親は息子よりも娘の相手となり、もっとおだやかな遊びをします。また男児と女児に与えられる玩具は赤ん坊のころから異っています。男児にはトラック、野球のボールやバットなど、女児には人形やままごと道具などが与えられます。あるいは慣習に順応させるとき、身じまいをきちんとするようにとか、行儀をよくするとか、乱暴しないようにとか、静かにするようにとかしつけるとき、男女児には違った比重でしつけます。普通はこれらの点については、女児の方がきびしくしつけられています。また、男児はより活動的で女児より精力的にみえます。事実、男児は女児よりも基礎新陳代謝の率が高いことは、すでに知られています。男児は休んでいる状態ですら、より多くのエネルギーをもやしているのです。以上のすべてのことがらが、男女児のその行動のちがいの発生の要因と考えられます。

次に性の類型化と社会的階級との関係をみてみましょう。ラバン

は児童を男女別に中流階級と下層階級にわけて、各々に性別にふさわしい玩具を選ばせて、その性の類型化との関係をしらべています。それによると、下層階級の男子が、男らしい興味についての同一化が一番高く（男らしい玩具を選ぶことを同一化の規準としています）、中流階級の女子が女らしい興味についての同一化が最も低い。下層階級の女子と、中流階級の男子は先の二者の中間に位します。その年令をみますと、下層階級の男子は、男らしい行動（女らしいものより男らしい玩具を選ぶことをさします）を四、五才になるまでに、はっきり示しています。中流階級の女子は、同様の女らしい行動を、その後、さらに三、四年たたないと示していません。この相違の理由については、いろいろに考えられますが、男らしい、或いは女らしい役割は、下層階級や労働者階級の方が、よりはっきり区別されていると言えましょう。その上、そこでは男子の役割の方が、より好ましいとみなされがちです。労働者階級の男子は、重労働に従事する場合が多く、家庭では殆んど子どもの世話や家事の手伝いなどする余裕をもっていません。また労働者階級の女子が雇われた場合は、いわゆる女の仕事といわれる家事、料理或いは洗濯などの仕事に従事します。一方、中流階級では、父も母も教師であったり、弁護士であったり、また商売に従事したりしています。妻は家族の財政の管理もします。母親も自動車を運転します。父親は時には台所の皿洗いを手伝い、会社の帰りに買物をすることもあるでしょう。したがって、子どもにとって、性別にふさわしい行動のモデルとしては、あまりはっきりした存在ではありません。また、下層階級の親は、一般に子どもの個人差について寛容ではありません。中流階級の親の方が、個人差については、理解が深く寛大のようです。たとえば労働者階級の男子は、男らしく振るまうことを強いられるばかりでなく、男らしくないと罰せられたり、からかわれたりします。また、中流階級の妻は、夫と対抗意識をもったり、主婦の座に不満を抱いたりする傾向があります。このことは娘にとって、積極的な明瞭な女らしさのモデルとしてはうつらないのではないでしょうか。

間接的ではあるけれども、このような仮説を裏付けるような研究の結果があるので、ご紹介しましょう。ブラウンは五才半から十一才半の男子三〇三名、女子三一〇名、共に幼稚園から、公立の学校五学年に及ぶ生徒で、中流階級の出身を対象としています。用いた方法は「それ」テスト といわれているものです。「それ」というのは、線がきの人形で、顔には、目鼻のない、男女の区別がつかないもので、実験者が「それ」はと呼びかけ、被験児に自由に人形の性をきめさせる方法です。そして、子どもは「それ」を自分と同一視するものとして、子どもが「それ」に選んだ性の役割や行動は、子ども自身のものとして選んでいるという仮説にもとづいています。

先ず「それ」に対して男児か女児かえらばせて、次に男の玩具と

女のらしい玩具を一組にした幾組みかの中から、玩具を一つだけえらばせました。また、非常に男らしい男児から、非常に女らしい女児へと、少しずつその程度を変えて描かれた幾つかの人形の絵の中から、一つをえらばせました。そして男らしいものの選択に高い得点を与え、女らしいものの選択に低い点をあたえ、その結果、得点が高ければ、性の役割の採択がより男らしいと推定したのです。その結果をみると、各年令について、五学年に至るまで、女子の多くは、男の子の玩具を選んでいます。そして女子の多くは、母親よりも父親になりたいといっています。男子は、女子にくらべて、ずっと早くおさないうちに性別の適切な採択を示しています。幼稚園児でさえ、男子の七十五パーセントが男の玩具を好み、七十七パーセントが父親の役割を好んでいます。この男らしい玩具と父親の役割の二つを選んだ男子の率は二年生になるまでに九十パーセントに達して、その後、同じ率がつづきます。一方、女子の場合は、五年生でさえ、三十七パーセントが男子の玩具をえらび、二十一パーセントが母親よりもむしろ父親になりたいといっています。

ハータップとヅウクも、三、四才の保育園児について同じような結果を報告しています。それによると、この年令の男児はやはり、女児よりも適切な性の役割の採択を示しています。また、四才の女児は三才の女児より女らしく、四才の男児は三才の男児よりも男らしい採択をしています。しかし、この研究では、下層階級の子どもが中流階級の子どもより性差が著しいという結果は出ていません。これは保育園の経験と関係があるのかとも思われます。保育園は、普通許容的雰囲気が強いので、下層階級の子どもには家庭ほどに性別による行動の区別をするように強制をうけなかったであろうことや、中流階級の子どもは集団生活のおかげで、適切な性別の行動を習得する機会を得たと考えられます。またこの研究の下層階級は、その下層階級の上の部に属するので、これも一つの原因であるかもしれません。

次に兄や姉の存在が、性の類型化に影響をあたえるだろうと想像されます。フォルズとスミスは四才九ヵ月から五才九ヵ月の児童、三十八名について、次のような点を明らかにしています。その三十八名の児童の中、一人っ子が男子十名、女子十名、兄のいる男子が十名、姉のいる女子が八名となっています。一人も性の異る兄姉はいませんでした。それぞれの児童に女らしい遊びと、男らしい遊びの二つの絵から、一枚を選ばせた結果、男子は女子より男らしい遊びを選ぶ率が高く、また兄姉のある児童は一人っ子よりも、それぞれの性に適切な性の類型化が早くおこっています。すなわち、性にふさわしいと思われる遊びを選ぶ率が高くなっています。これは、男子には父と兄、女子には母と姉というように、いわば二つのモデルの存在が、性の類型化を促進させたと思われます。

最後に性の類型化は異った文化地域ではどのように行なわれてい

るのでしょうか。男女の性別による行動の相違は殆んどすべての社会にみられると思います。バリイ、ベイコン、チャイルドは一一〇の文化についての文化人類学者による記録をもとにして次の点を明らかにしています。先ず「責任をとること」に関して、八十四の社会に性差を見出し「功績」に関して三十一の社会に性差を見出しています。また、多くの社会では、女子は他人の世話をしたり、責任を持つことをしつけられています。一方男子は功績と独立独行が強く要求されています。従順性については、資料の入手できた六十九の文化について大半は男女児に区別してしつけはしていないようです。しかし、その中、三十五パーセントの社会は女子にそれをより強く要求し、三パーセントが男子にそれを強く求めています。また、生活様式によっても、その性差のあらわれ方がちがうようです。狩に依存する社会、遊牧生活者、食事の主要素として根菜でなくて穀類を栽培している社会の方が、性差が、きびしく強調されているようです。それから、一婦制度の社会より、多妻制をみとめている社会において性差は、はっきりしている傾向があります。それらについての理由は、容易に考えられます。狩をしたり放浪する生活は強い体力を持つ男子が女子ときわだって異った役割をとるでしょう。穀類栽培は根菜より、広い土地と腕力を必要とするので、男の役割がはっきりしてきます。また数人の妻がいれば、男が家事に従事するなどということはないでしょうが、一妻の場合は、たとえば妻の病気や出産時には、男が女の仕事をすることもあると考えられます。

以上、性の類型化の発生について考えてみました。次号で、さらに性の同一化について述べてみたいと思います。

文　献

Barry. H., III, Bacon, Margaret K., and Child, I. L. A cross-cultural survey of some sex differences in socialization. J. abnorm. soc. Psychol. 1957, 55, 327-332

Fouls, Lydia B., and Smith, W. D. Sex-role learning of five-year olds. J. genet. Psychol., 1956, 53, 105-116

Brown, D. G. Masculinity-feminity development in children. J. consult. Psychol., 1957, 21, 197-202

Colley, T. The nature and origins of psychological sexual identity. Psychol. Rev., 1959, 66,165-177

Hartup, W. W. and Zook, Elsie A. Sex-role preference in three-and-four year old children. J. consult. Psychol., 1960

Lynn, D. B. Sex differences in masculine and feminine identification. Psychol. Rev., 1959, 66, 126-135

Rabban, M. Sex-role identification in young children in two diverse social groups Genet. Psychol. Monogr., 1950, 42, 81-158

Sears, Pauline S. Doll-play aggression in normal young children: influence of sex, a age, sibling status, father's absence. Psychol. Monogr., 1951, 65, Whole No. 323, No. 6

Sears, Pauline S. Child-rearing factors related to playing of sex-typed roles. Amer. Psychologist, 1953, 8, 431

（津田塾大学）